

第2学年2組 社会科学習指導案

平成29年6月29日(木) 第3時限 場所 2年2組教室 指導者 酒井 孝康

1 題材名 (九州地方) (6時間完了 本時6/6)

2 題材の目標

- (1) 九州地方にある屋久島の観光産業や自然環境について関心をもち、そのことを両立していくために必要なことを意欲的に調べようとする。(関心・意欲・態度)
- (2) 九州地方が産業の発展と自然環境の保護を両立し、持続可能な開発ができるかを、資料をもとに考えを構築し発表することができる。(思考・判断・表現)
- (3) 九州地方の産業や自然環境の現状を資料から読み取り、自らの意見を構築するための根拠とすることができる。(資料活用の技能)
- (4) 九州地方の産業の発達と自然環境の保全の両立や、持続可能な開発をするための人々の取り組みについて理解することができる。(知識・理解)

3 構 想

本学級で行った社会科についての授業アンケートの結果は、「社会科の授業が好き」と答えた生徒は21名、55%である。このことから半数の生徒が授業について前向きに捉えている。授業中の挙手もそれに比例し、20名ほどが授業中に意見を言うことができる。しかし、社会科を、知識を覚える暗記科目と捉えている生徒も多くいるのが現状である。一問一答のような問いには答えることができ、自分の考えを発表することが苦手な生徒が多く、授業アンケートでは、資料の読み取りが苦手と答えた生徒が27名、71%に上る。この要因の一つとして、知識が断片的で、関係認識が不十分であるために自分の意見に自信がもてないことが挙げられる。

本単元では、屋久島の自然環境と観光産業を取り上げる。私たちが暮らす日本は温暖で、豊かな自然に恵まれている。日本人は昔からその恩恵を受け、自然と共に生活してきた。その一方で、さまざまな自然災害にも悩まされてきた。本校の位置する額田地区も市街化があまり進んでおらず、生徒の周りにも自然があふれているが、意識的に見なければ日常生活で『自然』を意識する瞬間は多くない。しかし、現代においても人々の生活は自然環境に大きく影響を受けており、さまざまな工夫をすることによって自然と共に生きている。今回、九州地方を、とりわけ屋久島を扱う。屋久島は降水量も多く、きれいな海、そして豊かな森と特色ある自然環境のもとに人々の生活が営まれている。豊かな自然と、そこに根付く産業を関連付けて学習することで、今後日本の他地域を学習するときの考えの土台となる視点を身に付けることができるだろう。

本単元で扱う九州地方は生徒たちにとってなじみの少ない地域である。そのため、単元の導入では、教師が屋久島を訪れた体験をもとに自作した資料で自然の豊かさを紹介する。屋久島の豊かな自然を知ること、そこに根付く産業やそこに暮らす人々の生活について考える動機付けにする。さらに、屋久島は持続可能に開発できるかという単元を貫く課題を設定し、生徒の意識がつながる単元構成を行う。そうすることで、子どもの思考が連続し、継続的に追及活動が行えるだろう。

生徒が考えを構築する段階では、根拠を確かにできるよう教師の自作した資料の読み取り活動を行う。付箋を使って資料から読み取った事実を分類することで、生徒は資料を読み取る視点を身に付け、観光客の訪問先や数の変化を関連付けて考え、屋久島の産業が自然環境の恩恵

なしには成り立たないことに気付けるだろう。

本時では、縄文杉への立ち入り制限問題を取り上げる。豊かな自然環境をもつ屋久島の課題である環境保全と産業の発展という両立の難しい問題について考えることで生徒たちは自分なりに価値判断を行い、問題の解決に向けた自分の考えをもてるようにしたい。その中で、住民のアンケート結果をもとにそこに住む人の思いに目を向け、自然と共生する目指すべき日本人の姿を考えられるようにしたい。単元の最後に自然の負の面である災害や、人の営みによって起きた公害問題を取り上げる。水俣病に代表される公害を乗り越えて環境モデル都市としての取り組みを学ぶことで、過去から未来へと続く、自然環境と人々の生活との深い関係を知り、次世代の主権者として持続可能な社会を目指す姿を目指したい。

5 本時の学習指導

(1) 目標

- ①屋久島の観光産業の発展と自然環境の保護を両立し、持続可能な開発ができるかを、資料をもとに自らの考えを構築し発表することができる。(社会的な思考・判断・表現)
- ②屋久島の観光産業や自然環境の現状を資料から読み取り、自らの意見を構築するための根拠とすることができる。(資料活用の技能)

(2) 本時の手立て

- ①資料から読み取った事実から考えを構築した部分に赤線を書き入れることで根拠に基づいた話し合いができるようにする。
- ②屋久島の島民の思いが分かるように、鹿児島県が実施した住民アンケートの結果を提示する。

(3) 本時の授業

本時までには、屋久島の自然環境と産業について理解した生徒たちに、導入として屋久島の自然環境や産業の様子が分かるように教師が訪れた屋久島の様子を提示する。そうすることで屋久島の自然環境、産業について想起させる。

本時の課題として、単元を貫いてきた屋久島という題材をもとに、縄文杉の立ち入り制限について資料から読み取った事実をもとに生徒に考えさせる。自分の考えの根拠となる部分に赤線で印をつけることで自信をもって自分の考えを発言できるだろう。また、問題を考えるなかで生徒は豊かな自然としての縄文杉と観光資源としての縄文杉、二つの面があることに気付くだろう。そうすることで、生徒は事象を多面的に捉え、自然環境と産業の両立の難しさに理解を深めることができるだろう。また、生徒が住民アンケートの結果を読み取り、屋久島に住む人々の思いに触れる。島民の思いに触れることで、生徒はより切実感をもって屋久島の持続可能な開発について考えるだろう。

生徒が持続可能な開発をするためにはどんなことが必要かを考えることで、これからの社会を担う主権者としての資質や能力を高めていけることを期待している。

(4) 展 開

時	生徒の活動	教師の支援及び手立て
指向 (5)	1 屋久島の自然環境、産業の抱える課題を 確認する。 ・観光客の車が多すぎて、登山道の周りが危険。島民の生活にも支障がある。 ・トイレの数や携帯トイレの回収費用が高い。 ・世界自然遺産が見世物になっている。	・屋久島の自然環境の様子を視覚的に捉えるために、屋久杉、海、屋久鹿の写真を提示する。 ・屋久島の産業について視覚的に捉えるために、教師がトレッキングを行っている写真を提示する。 発「屋久島の産業はどんな課題を抱えているだろうか。」
問題 (2)	2 本時の学習課題をつかむ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">屋久島は持続可能に開発できるだろうか。</div>	
追究 (30)	3 縄文杉への立ち入り制限をすべきか考 える。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">【制限する】 ◎縄文杉を見るためにたくさんの観光客が来ている。それによって森が荒れるなら制限は仕方ない。 ◎お金がないと環境の保護もできない。入山料をとるなど本当に行きたい人だけいけるようにした方がよい ○お金がないと環境保護もできない。 ○縄文杉を守るためなら仕方ない 【制限しない】 ◎制限すると観光客も減ってしまう。島の人の生活を維持するためには制限はしない方がよい。 ○制限をすると観光客が減ってしまう。 △環境保護のため制限した方がいい。</div>	発『環境保全のために縄文杉への立ち入りを制限すべきだろうか。』 ・話し合いが促進されるようコの字隊形で話し合いを行う。 ◎資料から読み取った事実から考えを構築した部分に赤線を書き入れ、根拠に基づいた話し合いができるよう促す。 ◎屋久島の島民の思いが分かるように、鹿児島県が実施した住民アンケートの結果を提示し、島民の自然も残したいが観光客も増えてほしいという思いに気付けるようにする。
整理 (10)	4 どうすれば屋久島が持続可能に開発できるか考える。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">・開発を優先して、自然を破壊してしまうと観光客も来なくなる。バイオトイレなど設置し、環境を守る活動を広げていくことが必要。 ・縄文杉以外の観光資源を開発すればよい。 ・観光客に協力してもらってどんどんエコツアーリズムを広げていけばいい。 ・ほかの他の場所を開発するにしても、縄文杉のように荒れてしまっは意味がない。</div>	発『屋久島は観光と環境保全を両立させて、持続可能に開発していくためには何が必要なのだろうか』 ・自分の考えを見つめ直すことができるように、グループで関わり合い、屋久島を持続可能に開発する方法を考えられるようにする。 ・関わり合いが促進されるよう、司会、発表者の役割を分担する。
	5 本時の振り返りを行う。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">・開発を優先して自然が破壊されれば観光資源自体がなくなってしまう。 ・本当に持続可能に開発するためには一つの条件だけ考えていてはできない。</div>	

①環境保全と観光業の発展の両立を目指し、資料を根拠として他者の意見を参考に自らの考えを構築し、発表することができる。(思考・判断・表現 活動3・4の様子から)

②屋久島に住む島民の思いをアンケート資料から読み取り、環境保全と観光業の両立を目指すための根拠とすることができる。(資料 活動4の様子 活動5のふりかえりから)